電波新聞

2011年(平成23年)12月14日(水曜日)

デジタル通信革命の舞台裏

内海善雄 前ITU事務総局長

——14

情報化社会実現の足掛かり

国威を発揚した京都全権委員会議

1994年に京都で開催されたITU京都全権委員会議は、いろいろな意味で日本が元気だった時代を象徴する出来事だった。会議は、4週間、1200人が出席し、日本で開催された最大規模の国際会議であった。

今も関係者が褒める

日本のホスピタリティが素晴らしかったことは当然であるが、ITUの歴史上、空前絶後の記録である、一度のナイト・セッションもなく議事進行を予定通り終了することができた。20年後の今でもITU関係者から「京都会議は素晴らしかった」と褒められている。

そもそも日本が、この会議を招請したのは、1990年に開催されたニース全権委員会議においてである。三浦信氏をIFRB（国際周波数登録委員会）委員に立候補させたところ、中国が対抗馬を立ててきて大変苦戦した。そこで、選挙戦を有利にするため、京都会議の招請をしたのであった。

国際選挙戦では、各国代表者が喜ぶ立候補局長と標準化局長というIK、メーカーともども当然のように分担に応じてくれた。10年後にITU事務総局長としてサミット開催のために、日本で資金集めを行った際、NTTドコモしか応じてくれなかったことと比較して、当時の日本の経済力は、4億円の負担など問題ではなかったのだ。「開催する以上は、出席者が日本は素晴らしかったと感心して帰るようにせよ」との白井太政策局長の言葉は、今も忘れられない。必要経費のことなど省幹部は誰も心配しなかったのだ。

ロジ担当の坂東正明室長の周到な準備で会場、レセプション、夫人プログラム、エクスカーションとすべてが順調に、また、盛大に行われた。一例を挙げれば、会場の京都国際会館で今も語り草になっている日本政府主催のレセプションでの余興である。

祇園の芸妓総上げの「手打ち」であった。京都へ出張した際、お茶屋「一力」の女将に相談したところ、提案されたものである。日本人の我々もあまり見ることのできないものを外国の参加者のために、予算の心配をすることなくお願いすることができたのだ。

3年も準備期間があったので、主な国際会議にはすべて出席をして、顔を売ることができた。また、外国の顔役の個性や問題点を知ることもできた。その知識を活用して、議長職を務めたので、会議は何の混乱もなく完璧に進んだ。

日本は準備に3年間

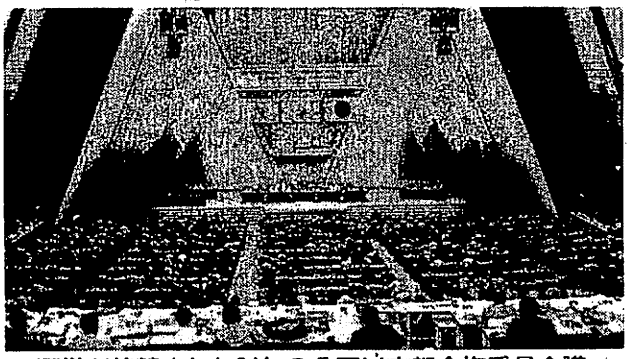
後にITUの事務総局長になって分かったことだが、日本のように3年間も徹底的に準備をする国はどこにもない。どの国も準備は半年程度、会場の準備さえ怪しく、また、議長になる政府高官も国際会議経験がなく、様子がまるで分からないのが通例で、事務局泣かせである。

このような日本の完璧主義は、大きな強みであると同時に、スピードが要請される現代、弱点でもあり、また、何事にも消極的になってしまう。

京都会議では、ITUに「政策フォーラム」が設立され、後に同フォーラムで、IP電話の自由化が国際合意された。いわば、京都会議が、世界中どこでも市内料金とほぼ同じ料金で電話がかけられる情報化社会を実現するきっかけになったのである。

京都会議の成功のおかげで、私はITUの事務総局長に選出されることにもなった。

（つづく）



運営が絶賛された94年のITU京都全権委員会議